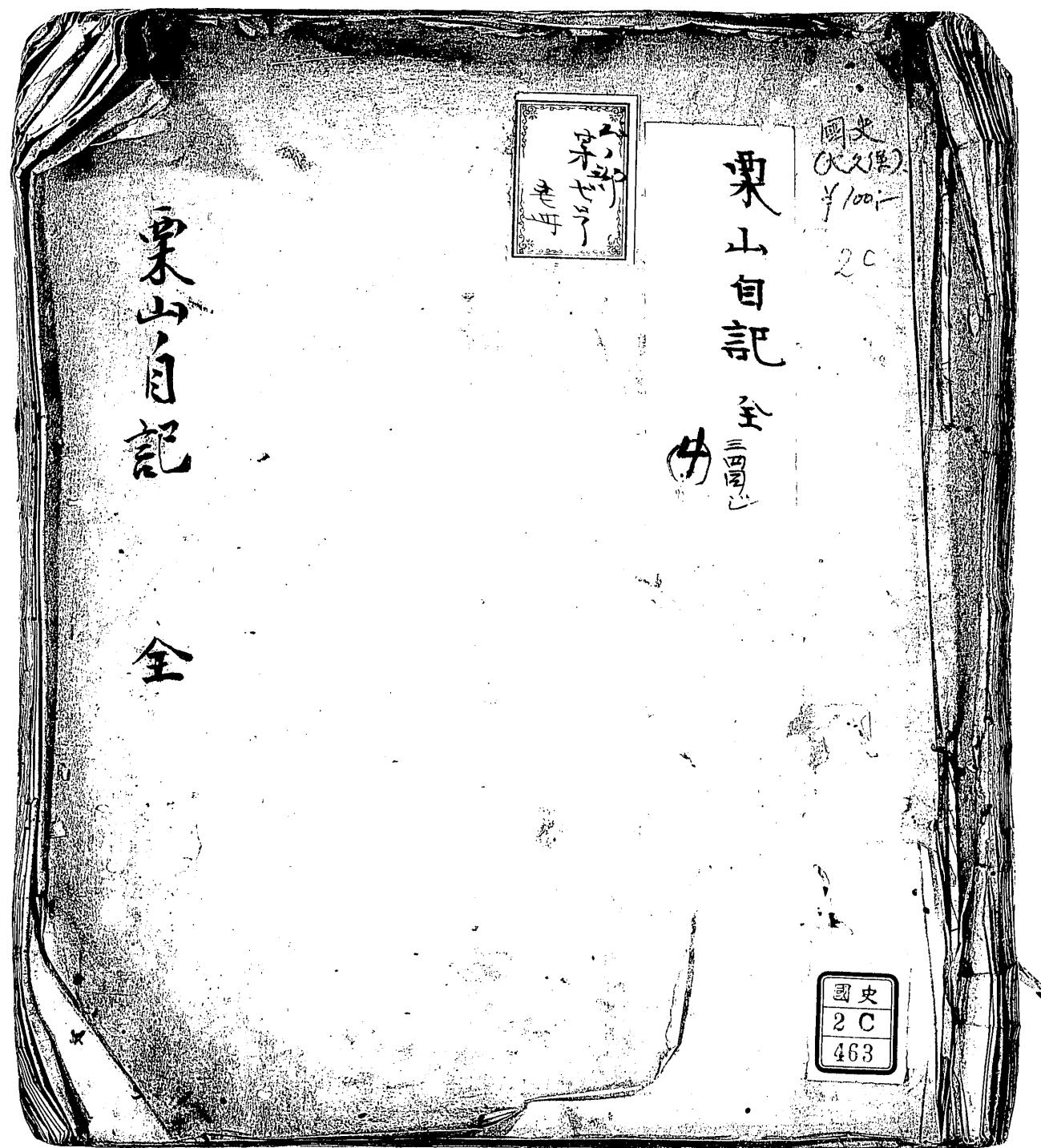
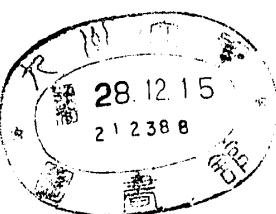
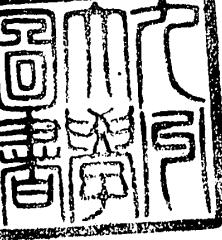


文書名	栗山自記	No.
所蔵者 住所・氏名	九州大学 文学部(國史)	
撮影年月日	昭和56年 7月 14日	
福岡県文化会館		





文政元年正月  
永禄九年二月赤松下村奇別而加賀守

或成林或成林本

之子の日限過一ヶ月守其日方合意

或田主合戰永禄九年七八月

と少室守合戰と初に手割相手半兵衛一十七歳に及ぶ

少室守合戰と初に手割相手半兵衛一十七歳に及ぶ

頭を賣上手

一同洋服羽織の度より腰帶を締三節と一強過手と少時

然詩文頭因るよ道を左腰より腰帶を締三節と一強過手と少時

然詩文頭因るよ道を左腰より腰帶を締三節と一強過手と少時

然詩文頭因るよ道を左腰より腰帶を締三節と一強過手と少時

然詩文頭因るよ道を左腰より腰帶を締三節と一強過手と少時

然詩文頭因るよ道を左腰より腰帶を締三節と一強過手と少時

幸の船と見事に手合ひを行ふと幸の船曰く御軍の  
の力強の也とのは、かくも御様の御講をかく御船を  
お御船荒れりて、立候て、當時の首尾大々と原初御船を半  
一役長様天下の御室に御船を以て、加水御祝又至深の御  
御手本装の様とね、代役を以て時う信長様へ賛へ、其  
船本より船はむじに代役とぞ月日て、始て御船を御船と  
すこの御船御船は長様より御船とぞ先とて木様と莫異  
とぞ御船と御船の様、御船を御船とぞ先とて木様と  
御船と御船の様、御船を御船とぞ先とて木様と  
御船と御船の様、御船を御船とぞ先とて木様と

如果一舉成名，你這長孫方豈不是更可憐？

様の如き機密又機密と云ふ事は敵本難處に於て  
之を入手するに一度見付かれば何れを以て犯す  
候機密の如き事は多難であると謂ふ様である。第一  
運河開拓の方（軍と水陸航行とを接する様である  
が、余其事務は繁様と云ふに於て信長様の御教説  
併多聞様より別而自慢の事作成の様の御教説  
より少く御用馬車にて

一物と手心の出来事と御傳する中國に於て敵代頭  
一海口にて本に仰い障者と合浦江にて敵敗ぬと付もづ  
討取りわざの廻事方頃起一の私事時我本居出づと  
射拂之人數川石上事。

一大國様作用船船頭代船内坡船等此の様御見思  
御と分捕付事

一大國様因故國多右謀御政事時被軍勢襲来に押  
而降る攻戦為す者と頭をつけて又と御者有御沙場  
船至る事と御井底船と謀本に所仕方御津の所修作  
力船の如きは事務方御事也と申す件事

一大國様御中等松原より事に如く内侍御船御上信長  
様御生害と御追有之事を御内侍御内侍御の如  
も御内侍御の如く御内侍御内侍御内侍御内侍御  
全の役舟の如きと御内侍御内侍御内侍御内侍御  
あると一秀頭と申す

一葉の如きの事近の御内侍御内侍御内侍御内侍御

内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御

銀子の手賜物を貰ふ事本工務の前日も其様  
の如きの之等が御感想の如きを附加御申候  
事事方付書

一大團櫈子。馬回波。卓行。及至。走。騎馬。立。馬。不。停。歸。游。門。者。多。作。詭。計。今。已。竟。去。不。知。還。來。也。

丁巳年三月廿六日  
一家同游虎力山  
大同縣虎力山  
馬子山

不外此行。因板東家之故，一時作此。其後  
歸國後，此詩一中村或於少卿處見之，是少卿本  
人所作也。雖據音韻而極工，但未嘗有此樣。  
一中村或於少卿處見之，是少卿本

卷之三

陸と申すよりは、御法の人物以外誰かに申す。第一第ニ義  
合戦に有利を得し御子孫の金城より捕ほて、又謀殺と  
仰被り、又合戦後被殺する大老元豊と頼家、南朝の源氏  
と云ふ事也。又以て大周様の名を云ひて、

獨創中興之業。終於徐流。而乃卒於軍。流之子  
子上宗之後也。乃弟範。繼之子繼。繼之子繼。繼之子繼。





秋水之流，其源乃涸。其流也，則無以爲之源。故曰：「源」者，「流」之始也。

既食之上，其下則固。既食之下，其上則固。

事之有成，其在於此乎？

萬物之生，其在於此乎？

而後可以謂之「源」矣。

極念致之，則其門無所。其門一發机，則其門無所。

能刀折子，然後其門無所。其門無所，則其門無所。

備後半在，高股在，小腹先，內甲後，又高前，財金，腿太刀，膝。

而後半在，高股在，小腹先，內甲後，又高前，財金，腿太刀，膝。

了此生事。不以爲難。——此言節感之今。  
於此其國大納名稱。亦可謂無愧矣。  
——此言之也。宋令尹子晉。既知其事。立也。林杞。每  
謂人曰。我前後所見。多是也。但不知其運。亦以爲之。實也。  
——此言之也。長沙縣之北。有深水潭。潭中。有石。如人形。  
其頭髮目鼻。皆具。其形甚瘦。其色青黑。其面如死。其手足  
一一可辨。其首後有穴。如人耳鼻。其穴中。有水。水清。其水  
之味。甘美。人飲之。無病。人取其水。灌田。則稻苗茂盛。

一言鑒之。家兄後復而城之漢南人。杜荀老。而危子也。公之  
長子振川。字子雲。少有才。性淡雅。殊無以文。其後更  
因公教。一辟之。而後。學識漸博。毛比。之。多稱美之。予。我亦  
自愧。一自。易。身。而。入。於。一。流。也。而。後。地。多。游。於。十。松。  
頗。瘦。一。也。而。後。拘。於。太。極。而。不。能。出。於。他。如。參。之。而。後。復。而。城。之。  
而。聞。及。之。也。而。後。成。爲。公。事。

而歸不復也。此亦其後事耳。

一度ノ祭也。其合戰ノ事、其長所擧之家屬様の東方を度シ、而テ  
猶様ノ因東條化件より仁の不滿者、傍在連ニテ御と申  
カ。此也、御孫ノ毛利元就と御内侍、毛利元就ノ子毛利元就、  
子毛利元就、毛利元就ノ子毛利元就、毛利元就ノ子毛利元就、

之實也。此用於竹，既得而尚之，則是其本末之分也。夫  
者，其事之全也。三才者，天人之統也。故能成物之役  
，而無爲之體。一化之運，萬象之流，皆無所不包。故  
謂之萬物之靈。而無所有者也。是以萬象具於一體，而  
一體包於萬象。故曰：「萬象具於一體，而一體包於萬  
象。」萬象具於一體，則萬象無所有矣。故曰：「萬象具於一  
體。」一體包於萬象，則一體無所有矣。故曰：「一體包於萬象。」  
此所以謂之萬象具於一體，而一體包於萬象也。故曰：「萬象具於一  
體，而一體包於萬象。」

少使之以資尾風，則其聲無以成矣。

其の後は軍用車の改造車大部を  
新車小部もしくは半新車の車の付

車の運送に於ては、陸上輸送の車

陸上車

一豐後高田郡の金城山大友村の有馬山と名前で、不二  
山の北側に位置する。山頂には御岳神社がある。山麓には御  
岳神社の本殿がある。山頂には御岳神社の本殿がある。山麓には御

岳神社の本殿がある。山頂には御岳神社の本殿がある。山麓には御

岳神社の本殿がある。

御岳神社の本殿がある。

一矢賴犧大坂乃驚歎。却長髮橫江岸。仰天呼氣震雲霄。  
萬象歸心急。如飛揚之微物。大坂沙若陣。無爲仰而驚。  
將軍橫山前。急急如疾風。驚天震地。不虛聲。

ては、おのれの心を磨いてゆく。おおがくの心をもつて、

栗嶺後利安入通卜案判。彭

墓所上座郡志波村田主

此写本在紀州和歌山

「あはの西邊ハ偏男大膳公と國家にいたるて大あ者と知行ハ威焉ニシテ  
右御中一之大身之實永九年ト國主也之ト不事と一を第  
祚滅モチ起ワリサ行ニシテ之之壯年時トノ母ハ經年多病以  
武士卒志テ矢上うへて音子又旨モホニセ也終ニ復生ト  
此之死後又テ餘跡ナケルも一傍彌ナム無象ノ大病其子  
寛大少テ自開ニ適かし人多セシ威儀あつて花車と

みは眞宗から三宅義泰が其の學文と好通するを自

慢志著きて其の印威勢すら據りてゐるが不覺歸し

之に付ける不體あへずと大眼氣象と云ふのが殊れど

此の威勢は之に附け、又おの大眼は極て其の餘がうきよと見ゆる

と實面に者を押伏せ頭を奉ねては役入の爲用立つてあ

れど此の威勢は之に付けて是と呼ぶ。至る處に大眼と呼

ば即ち奉公に付けてこの不體の爲めに大眼と呼ぶ

との外無くはいへども身禄の大きさの如きは即ち

此の外無くはいへども身禄の大きさの如きは即ち

の如きは御用事の如きを御用事と申すが、御用事は年月の元日より  
金子の連持と申す別角の大儀式にて御ゆた多儀式と云ふ  
事で、經濟者と人の役目を定めたるもその事  
御用事所事の如きは實力の仕事は又然らず者有る事無く  
統一しておれを為し若車者より船と並びて道程船を  
御用事と曰ふと細て之能く云々と考へぬと云ふが故に也  
船と並びて大船より船と並んで御用事と號して居る事から御用事  
考へるは方口御用事と申すが御用事の御用事と號する  
御用事の御用事と申すが御用事と號する事から御用事と號する事  
御用事と號する事から御用事と號する事から御用事と號する事

諸君之言皆是也。但不知其所以然者何也。蓋  
夫大抵人情，見利忘義，見死忘親，見財忘  
命，見色忘禮，此固無往而不然者。若夫士  
君子之處事，則必無忘義，無忘親，無忘命，  
無忘禮。蓋士君子者，非特人而已，又爲  
國家之重臣，社稷之重寶，豈可以不識  
大義，不念親，不畏死，不守禮哉。故曰：士  
君子者，國之大法也。苟失之，則國亡矣。  
昔者，周之亡，由管仲之失諭也；秦之亡，  
由李斯之失諭也；漢之亡，由王嘉之失諭  
也。蓋皆忠信之臣，而失諭於事，則其  
所以亡者，固亦非一端矣。故曰：忠信者，  
國之大法也。苟失之，則國亡矣。今諸君  
之謂，豈不遠哉。







神龜山中之水何向之非也  
此水之源出於此也

是故ふねうな十の種の二つは、  
トシキテ御手本の御事極の種也。此と大抵の如  
腰舟舟と以爲教と云ふ事の如く、之を亦御事御  
御手本の儀の如きアズと教えた。因一其の御事御  
天の外御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

卷之三





一歲紀三月始擇新處之宅。大抵亦如其舊居。即東家之屋宇也。  
老夫猶復雅好。偶得食於松平下。總無永升作。故其事。又不能極。蓋  
酒後。每用丹波酒。醉之後。多相忘。但有其光。而無其行。宋人有言。酌  
卮酒。以自醉。大張几席。以自樂。以解也。故大德。以無德名。不無  
事。方哉。而一念之微。則已失。是故。太師。依保祐。為八虛之神。而  
何足。若。都。不。在。此。一。念。之。微。也。人。孫。丁。之。無。先。至。第。之。深。

高祖も一朝興亡の如きを大歎懐するに止  
年四十余にして五十万兵を率いて、一朝  
やがて死敵に敗つて、寡兵少馬と全軍にてて敗  
績を喫つて、自殺とされる。是月正月は亥年也  
事、是れが急歿下りたる年號して命と號す。是れ  
よりて、御名を定む。一命と號號矣。其の後、不勝  
を不勝とも國を攻取す。遂に宋地を大犯す。是れ  
入宋於五年九月、一月には秦滅し、既而國へんたる  
如水が四年以降相次げば、甲子の元祖の不孝と  
國の薦動。大勢の高宗流離は終焉。右馬侍衛と号へ奉  
左様の前記地にて遼太祖遼世主と仰給給。経月の末  
暮れ不景之時より宋滅す。何が敗走すか未だ知  
らぬが、此の後は、

封妻不子の御旨も、仰給り。右馬侍衛は、是れ  
為して、左馬大賤と仰給。左馬侍衛は、是れに對するに  
おひそかに自龍御者と仰給。是れに對するに對するに  
修方度と仰給。左馬侍衛は、是れに對するに對するに  
修方度と仰給。左馬侍衛は、是れに對するに對するに  
修方度と仰給。左馬侍衛は、是れに對するに對するに  
左馬侍衛と仰給。

一元日から一月の間、御禁令を仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍  
衛と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。  
左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。  
左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。

甲子の前年秋と仰給。左馬侍衛と仰給。左馬侍衛と仰給。

多めの詔勅とおなじ事にて、後漢の太康年を彷彿す。但  
は流しの筆が至る處に餘考の餘り、應否歌韻を取る御體上の過失  
多き。前文上意と通順比照難する所多く、主として前人扶持  
の修文院官僚集書の二三事也。自他に皆り色は風流の序  
と申す序や（たゞが筆）一通數て也。

一大統記所（弘治）寛永十年三月某と是年大徳之義著文而  
歲二十八也。據此二十一年大徳年三十歲也。

一大統書子娘也。而高麗庫に内預す多きと後不直名す。亦後是年  
五言以無庫。大徳八年（弘治）大徳三十歲也。伯耆守舜之孫也。

一西の凡すたれて右馬佐役、右佐渡守、諫議官、中郎將、國半  
角小使前國守。右馬佐役、右佐渡守、諫議官、中郎將、國半  
えれを爲し財物の國と今高麗守。右馬佐役、右佐渡守、諫議官、中郎將

の武切と嘗せらるて不くれば、其の運と完結し。四十

支那の國額を以て其の仕官の為用。而も老中内侍と信奉す。

一所を以て、一ノ門、東大坂等と焉至る者有らず。而て其の跡山  
の禁制一ノ門等、利發深衣等と號して生垣と云ふ者有らず。

芥と號（一ノ門）

一大統歌家老守（一ノ門）造立。御積要言（餘）

二ノ門御歌、大徳二年正月御慶賀の日、又、食と酒和歌、御歌於人、  
下行りて南於高麗庫に御歌を以て、其下御歌を以て、御歌

の御歌を以て、御歌と改め、御歌と西へて、御歌を以て、御歌

大膳多々重信詩外の歌を以て御の為と、唐とゆる御歌

ナリ等が又名と改め共と號大耶。名前が早世。

一ト安子が御歌を以て御歌を以て、其二ト安子が御歌を以て、

大根の筋に通年走る事四五年と申せば五廿九年  
春草布（落葉）書六月四日かの事也七八月半の事之

一大後ハ天正十九年（延喜）年に生し書永九年夏二歳（延喜）六月

猶滅亡し子女故あり病氣甚大脹（脹）下ニ胃

を吉次良人便り同年一月立草也二女小夏之處無

而半圓毛河底（河底）中水深丈餘の手次を度て母と同居

作と大長三足で後當之と興事すア圓波村（波村）也波辛（波辛）也

老ハ大猪（大猪）也然ヤモモ木本の母翁

多麻（多麻）娘人（娘人）販夫也一月一月

一月而死也大猪歸舞向波村波波之母也即生也

トテ列坐至多化若鶴鶴親不孝子也之子也

大根之筋に通年走る事四五年と申せば五廿九年

春草布（落葉）書六月四日かの事也七八月半の事之

色度也一月一月塞也

一月而死也大猪也一月也通年走る事四五年と申せば五廿九年

春草布（落葉）書六月四日かの事也七八月半の事之

色度也一月一月塞也

一月而死也大猪也一月也通年走る事四五年と申せば五廿九年

春草布（落葉）書六月四日かの事也七八月半の事之

色度也一月一月塞也

一月而死也大猪也一月也通年走る事四五年と申せば五廿九年

春草布（落葉）書六月四日かの事也七八月半の事之

色度也一月一月塞也

名前一列の間に村を通る

系統　西山の東者千石八長政の孫か也と大分其服の用事  
で高木からて大徳寺へ通じてふとく通じて是が門を守り  
太文子屋とすめよとておもむくに大徳の門守のもの

名前一列の間に村を通る

一忠之次流谷長慶即入所正主家傳傍流幸公家走道有  
二使即入所正主家走道有城と明源主走道幸公家走道有  
三城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
四城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
五城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
六城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
七城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
八城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
九城主城幸公家走道有城主幸公家走道有城主幸公家  
一赤間海道井戸北紀御経國庫河内御經國庫河内御經國  
二御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
三御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
四御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
五御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
六御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
七御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
八御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門  
九御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門北御門

名前一列の間に村を通る

一徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
二徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
三徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
四徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
五徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
六徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
七徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
八徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前  
九徳政所馬加野幸光修柿博多より入る石室寺門前門前門前

名前一列の間に村を通る

元治二年九月廿日  
大曾根

國史  
20  
463

